和泉式部

生方たつゑ

読売新聞社

和泉式部（いずみしきぶ）　九七〇円

著　者　生方（うぶかた）たつゑ
編集人　松田延夫
発行人　二宮信親
発行所　読売新聞社
東京都千代田区大手町一の七の一　〒一〇〇
大阪市北区野崎町七七　〒五三〇
北九州市小倉北区明和町一の一一　〒八〇二
印刷所　図書印刷株式会社
製本所　協和製本株式会社
第一刷　昭和五十年二月十日
©生方たつゑ　昭和五十年　落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

0095-701640-8715　Printed in Japan

目

次

和泉の周辺……7
和泉の出生9　橘道貞との結婚12　為尊親王をめぐって13　敦道親王との恋17　帥宮喪失29　上東門院をめぐって36　小式部内侍38
性格と作風……51
作品の位置53　和泉の気質55　男性への不信62
王朝の流れ……73
世襲による文学の背景75　精神の拠点82
和泉式部日記考……93
和泉式部日記95　四月十余日(長保五年)97　宮との契り103　四月

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

から五月へ 113　五月雨のつれづれ 120　五月五日のころ 123　月夜の同車行 127　宮の疑惑 133　宮の訪れ 137　あきれた噂 142　七月 145　八月、石山詣で 150　九月二十余日、手習いの文 157　九月末、宮の代詠依頼 165　十月、手枕の袖 168　昼間の訪れ 181　濃やかな贈答 187　宮廷入りの決意 196　宮廷入り前の心境 201　十一月、和泉の心の乱れ 209　十二月十八日、宮廷入り 220　正月 225　終局 227

醒めていた和泉式部……233

あとがき……245

参考文献……247

装丁　栃折久美子

和泉式部

和泉の周辺

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

和泉の出生

代々儒家として世に知られてきた家柄に生をうけた和泉式部が、のちに長じて王朝の三人の才女の一人として、ゆるぎない位置を占めたということは、決して意外なことではなかった。

父は大江雅致である。雅致は文章生となり、それとともに任じられて式部丞となった。やがて累進して受領となっているが、当然その地位のものに任じられる太皇太后宮、つまり冷泉天皇の皇后で朱雀天皇の皇女昌子内親王の大進に任じられた。長保元年（九九九）のことである。のちに木工頭となり、まれに見る栄進を見せた人である。

母は越中守、平保衡の女であり、冷泉天皇皇后昌子の御乳母をつとめた人であった。

和泉式部は由緒ある父と母とをもった。生年月日は没年とともに不明であるけれど、一説によれば円融天皇の天延二年（九七四）であろうかと言われている。和泉式部の幼名ももちろん不明であり、娘時代は式部と呼ばれていたようだ。式部は女房としての呼び名であるのだから、たぶん父母の関係ふかい

太皇太后に仕えていたのかもしれぬ。

和泉式部は儒家の娘として、父雅致から和歌を学び、習字の手ほどきをうけ、教養ふかい子女として成長した。父の位置によって和泉式部は少女時代から宮仕えをし、宮廷をめぐる社会をひろく見つめる時をめぐまれたことは事実であった。他の女流歌人とは比べようもない、よい環境の中に育っていったと言えよう。

彼女の作品が文献に見られるようになったのは、一条天皇のころ編まれた拾遺集による。

性空上人のもとによみて遣しける　　雅致女式部

暗きより暗き道にぞ入りぬべきはるかに照らせ山の端の月

拾遺集にはこの一首だけがのせられている。性空上人のもとにて、とあるのはたぶんお仕えしている太皇太后宮が、播磨書写山の性空上人にいたく帰依されていられたから、和泉式部も同道してこの作があったのであろう。雅致女式部という名称も、彼女が宮仕えして付せられた呼び名となった証拠である。

歌は、法華経化城喩品の一句「従レ冥入二於冥一永不聞二佛名一」によるものであり、当時名歌とうたわれたものであった。

和泉式部の収録された歌数をかりに記そう。

拾遺集　一首
後拾遺集　六十七首
金葉集　五首
詞花集　十六首
千載集　二十一首
新古今集　二十五首

和泉式部は当時はなやかな歌人としてみとめられた以上に、死後ますます重要な位置を占めた。たとえば死後編纂（へんさん）された新古今集に収録された作品は、紀貫之についで第二位であることからしてもうなずける。和泉式部の作品の特色は恋をうたったものであるだけに、編纂された当時の社会がその卓越した歌によって人の思いを委託する手がかりになったことが明らかになろう。

しかも和泉式部はどの歌をうたうときでも実感の裏づけを必要とした。空想して恋を思うときでさえも、みずからの体験を核としてよんだ。

恋の歌
風物歌
社交歌（雑歌）

これら大別される歌の系譜があるとしても、彼女の歌は、つねに細部にしみじみとした哀感をもち、

題詠とも思えぬ実感が盛り上げられている特色をもっている。

橘道貞との結婚

和泉式部の結婚は二十六歳とも言われ、二十三歳の頃であったとも言われている。父の大江雅致の友人であった橘道貞と結ばれた和泉式部は、生涯歌人として名をしるす〝和泉〟を夫からもらう。和泉守橘道貞であったことによる。

橘道貞は当時有能な官吏であった。藤原道長から重用されていたほどであるから、和泉式部の相手としてはふさわしい人物であった。彼は実務家としても勝れていて、誠実であった。太皇太后宮昌子が病弱であったとき、自分の邸を提供して、療養の機会を与えたりした。

「所換え」は「病い替え」に通じるとも言われ、巫女的なもののけの呪法を信じていく時代のきざしを見せる一端としての、太皇太后の家うつりが見られるのも興味ふかい。

だが、和泉の人生はというより、和泉の恋は、太皇太后宮昌子を導火線として展開する。宿命の鎖はもつれ合い、断ち切られ、小説的な女の一面をつづり合わせるのであるけれど、橘道貞との結婚当時は

いたく平和であり、小式部内侍を生んだ。

あるときは夫道貞に従って任地に着き、

黒髪の乱れも知らずうち伏せばまづ掻きやりし人ぞ恋しき　　和泉式部

のような、道貞への思慕のみずみずしい作品をも残している。

お互いに任地を往復し合ったときのものであろう。

為尊親王をめぐって

しかし、療養中であられた太皇太后宮が薨ぜられると、邸内の始末がはじまって都へかえらねばならなくなった。心頼りの存在であった太皇太后宮を失った和泉式部の悲しみが、おりおり見舞われた皇子の為尊親王の悲しみと重なり合う奇縁が生じていた。見舞われる為尊親王は、秀麗な青年であられ、母宮を思われるやさしい性格であった。

逢う機会が度重なるにしたがって、母宮薨去の悲しみを支えてくれる和泉式部は、もはや単なる知人としての域にとどまりがたい人間関係になっていた。

為尊親王の火は和泉式部の炎ととけあっていき、和泉が橘の妻であるということも制約の中へは数えられぬ恋に変化していった。

はげしい恋であった。為尊親王は弾正宮と称せられていたが、宮と和泉式部の恋は人々を憂慮させた。恋に自由だと見られた平安期ではあったけれど、弾正宮と和泉式部の恋は当時の貴族の話題にのぼらないわけはなかった。

橘道貞は潔く離婚を決意した。和泉式部二十七歳、弾正宮二十四歳であった。

美貌であり、歌才があり、火のようにやけやすい才女和泉式部と、弾正宮との愛の交換は常識以上のものであったとも言われているけれど、なぜ和泉式部が誠実な橘道貞という夫を裏切って、年若い為尊親王にかたむいたのであろう。

「うかれ女」と道長が称したというほどである和泉式部のことだから、うかれ心のきざしと見られないわけはないけれど、和泉式部の心の隙にはまりこむべき空白地があったのではなかったか。

かつて橘道貞が任地におもむき、その間、都と任地とを往復するころ、和泉守という地位と財力にへつらい寄る女たちがなかったとは誰も保証することは出来ぬ。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c